

大学教員の職務満足度とウェルビーイング

本特集では大学教員の職務満足度やウェルビーイングを探究する。大学教員は高等教育や基礎研究を支える存在であり、広範な影響を考えれば、その在りようは注目に値する。しかし彼らの職務や生活の実態およびその認識については、議論する余地を残す。大学教員は職務やその環境に満足しているのだろうか。何が彼らの認識に影響するのだろうか。ウェルビーイングをどう捉えているのか。

私たちがこのような特集を組む背景には、大学を取り巻く政治・経済・社会的な圧力により、大学教員が自身の職務や生活に対して持つ認識は大きく揺らいでいると考えるためである。大学教員職の魅力には、自分のやりたいテーマに基づく研究をし、学問の拠点として自由闊達に議論できることがある。企業等での研究職に比べると、分野によっては賃金や労務管理では見劣りするとは言え、研究における自由度の高さが大学教員職の魅力だったはずである。大学教員職に対する社会的な威信の高さも加わるだろう。しかし近年、特に欧米諸国においては高等教育に対して反感が抱かれ、日本の大学でも学問の自由が疑問視されている。そして特に米国では、トランプ政権の誕生以降、大学に対する直接的な政治的圧力が学問の自由に抵触すると連日報道されている。

日本の大学現場からの疲弊も伝わる。大学教員職の中には、若手教員に限らず、長い年月や学費などの教育投資に見合わない待遇を甘受する教員も少なくない。任期のある不安定な職に就かざるを得ない状況や、研究に携わる時間など 1 ミリもないと考えられるほどの管理運営的な業務が山積みの状況にある。教育のみ、もしくは研究のみに携わる職務規程で雇用された大学教員も増えつつあることから、大学教員間の役割分担も進み、これにより教員間の分断を生じさせる状況が存在する。教育も研究もするという従来の大学教員のモデル自体が問われているのだ。

それでも私たち大学教員は依然として大学に居る。教員の個人的な視点からは、新学期が来れば学生が集い、見慣れた授業光景が広がる。研究費の申請に当たったの落ちたのと言う声が聞かれる。一見、何事も変わらない日常の様子である。しかし日本においては超少子化を控え、国際的には大学自治に関連しても耳を疑う報道がなされる中で、少しずつ何かが変わろうとしているように感じる。このような中で大学教員がどのように感じているのか、本特集号では大学教員の職務満足度やウェルビーイングについて問いたい。